途上国の現場から、そして研修の現場から

札幌市の中心部を流れる豊平川に2006年9月、サケが川を遡って里帰りしてきました。豊平川岸そばにある札幌市衛生研究所（以下「市衛研」）には9月10日、1990年代から続くJICA「新生児マススクリーニング」研修の元研修員4人がJICA札幌の招きで10日間のフォローアップ研修のため里帰り来訪しました。

新生児マススクリーニングとは、先天性の疾病を早期発見するために新生児を対象に行う血液検査のことです。日本では新生児全員が無料で受けています。そして、この検査によって、早期に治療することで発症を予防しています。逆に早期に治療されなければ重大な発達障害、最悪の場合には死にもつながってしまう危険性があります。救える新生児の命を救うために、多くの開発途上国でこのマススクリーニング検査の実施が強く望まれています。

JICA札幌では市衛研の協力のもと、1990年から16年間にわたって47カ国131人を対象にこの研修を行ってきました。そして、「新生児マススクリーニング国際学会」の第6回総会が日本で開催されるのをきっかけに、自分たちの国での取り組みや市衛研での研修成果の学会での発表、国際的な専門家との意見交換、市衛研での補完的な実習・講義を目的として、この9月にフォローアップ研修を実施しました。JICAでは、様々な形で帰国した研修員の活動を支援していますが、今回のように一度日本で研修を受けた研修員が再来日するのは、新しい試みです。

再来日したのは、自分たちの国で検査技術導入・定着のため努力してきたアルゼンチン（14年前参加）、メキシコ、タイ（9年前に参加）、ヨルダン（8年前に参加）からの研修員4名です。この研修員4名に自分たちの国での新生児マススクリーニングへの取り組み、そして自分たち自身の活動について発表してもらいました。

アルゼンチン　Ms. Pattin Jorgelina Adriana

マリアルドヴィカ病院　生化学課主任兼
ブエノスアイレススクリーニングプログラム専門員

日本での研修を受けた1993年当時、アルゼンチンでは法律で新生児全員がマススクリーニングを受けることが定められていましたが、経済危機による深刻な財源不足により、実際には、ほとんどの病院で実行されていませんでした。帰国後マススクリーニングプログラムの実施に向けて、保健省、州政府研究協議会等々、様々な関係者に対し、説得と働きかけを行いました。

札幌市衛生研究所でのフォローアップ研修

日本の研修で、検査技術だけでなく、様々な問題への対処方法、そしてその解決方法についても学びました。この経験を活かし、1994年に具体的なマススクリーニングプログラム実行プランを州保健局長に提言しました。そして、これがマススクリーニング実施への突破口となりました。このプログラムは、単にマススクリーニング検査を行うだけでなく、確定診断、治療、フォローアップ等その後のプロセスを全部含めた対応を行う内容でした。実施面での課題はまだたくさん残っていますが、まずは自分が所属する病院での改革を手がけています。

マススクリーニングプログラムの実行に必要な予算を獲得するために、関係者の説得等様々なことを行った当時を、「とにかく戦った」と、懐かしく振り返ったジョルジェリーナさん。今回のフォローアップ研修で幅広い人脈を築き、大きな自信がついたと、ますます意欲を見せてくれました。

タ　イ　Ms. Kevalee Unachak

チェンマイ大学医学部小児科助教授

1996年から新生児マススクリーニングが始まり、全国で約4ヶ所の検査センターが整備されました。JICAの研修から帰国した後、大学や医療施設での講義・講演、小児科医へのコンサルティング活動等を積極的に行ってきました。現在、97～98%でマススクリーニングが行われています。しかし、検査結果が出るまでの時間の短縮、検査後の確定診断、治療、フォローアップの体制整備等、まだまだ課題はたくさんありますが、引き続き新生児マススクリーニングプログラムの体制確立に向けて努力していきたいです。

第6回新生児マススクリーニング国際学会
ポスターセッションでタイの取り組みについて発表しました

メキシコ　Ms. Grandos-Cepeda Martha Lucia

国立周産期病院　新生児科　準教授

帰国して、まず新生児マススクリーニングプログラムの改善のため、専門分野ごとに検討委員会の設置に取り組みました。そして、保健医療関係者や両親を対象とした教材、パンフレット、リーフレットを作成し、普及・啓蒙活動を行いました。

この成果により、研修員の勤務する国立周産期病院の検査率は1997年当時92.4%であったのが、現在97.8%にまで向上しました。しかし、人口の多いメキシコでは、地域格差が大きく、全国平均は約60%です。より一層のマススクリーニング検査の普及・拡大が必要とされているところです。

メキシコ国立周産期病院にて、検査を行った新生児を抱く帰国研修員

次回、第7回マススクリーニング国際学会がメキシコで開催されることが決定しました。この学会をきっかけに、ますますメキシコでの新生児マススクリーニング体制整備が進むことが期待されます。

ヨルダン　Ms. Bahiyeh R. M. Quandalji

保健省　小児専門医

新生児マススクリーニングは、まだ初期段階にあります。JICAの研修で学んだマススクリーニング検査の重要性、知識等を、各種研修、セミナー、大学等で、継続的に講演や講義を行ってきました。

ようやく、WHOの支援によって、2つの州で新生児マススクリーニングプログラムの導入が始まったところです。将来的には南部と北部に拠点となるマススクリーニングセンターを造りたいと考えています。ヨルダンでは母子保健は重点施策の一つです。6歳以下の子供への予防注射を無料とし、大きな成果を上げています。このように新生児マススクリーニングプログラムが広がる土壌はあるので、今後も引き続き努力していかなければなりません。

母子手帳の整備、新生児の検診等、検査結果を踏まえ早期に治療できる体制、検査機器の整備等といった課題に、札幌で研修を受けた方々が立ち向かい、自分たちの国での新生児マススクリーニングの導入・拡大につとめ、そして10年以上がたち実を結びつつあります。札幌市衛生研究所で学んだのはこの4人だけではありません。これまでに47カ国131人の開発途上国の医療関係者が学んでいます。5年後、10年後、この研修によりまいた種が実を結ぶことが期待されます。

（JICA札幌　林）

＊本原稿は、青木公国際協力ジャーナリストの取材内容をもとに作成しています。青木ジャーナリストの取材内容の詳細についてはJICA札幌のホームページ、http://www.jica.go.jp/worldmap/hokkaidou.html#sapporoをご覧ください。